

悪魔の戦略に対抗する

ペテロの手紙 #1

ロバート・D・ルギンビル博士著

悪魔の戦略に対抗する:ペテロの手紙第一と第二は、一緒に学ぶのが最適です。というのは、この二通の手紙は同じ問題を取り扱っているからです。それは、サタンの攻撃に直面した際の霊的成長です。この二つの手紙において、ペテロは読者に対して霊的成長の必要性とその手段を思い出させているだけでなく、当時の信者の霊的成長を妨げていた二つの大きな危険についても言及しています。これらの危険、すなわち神のご計画からの個人的な逸脱や教義上の混乱は、今日においても依然として霊的成長に対する主な脅威となっています。気を逸らせることは、信者を主から遠ざけようとするサタンの戦略の中心的な部分です。信仰が強く確固として成熟した信者は、個人的な苦悩や誤った教義によって信仰が弱められた人よりも、背教者になる可能性はずっと低くなります。

- 第一の手紙で、ペテロは、信者が神の目的である霊的成長を遂げることを妨げる深刻な問題と、人生につきものの複雑な問題、すなわち**苦しみ**について取り上げています。
- 第二の手紙で、ペテロは信者を捕らえ、真理から遠ざけるもう一つの大きな脅威、すなわち**偽りの教え**について述べています。

ペテロのメッセージは、信仰深い信者は、この二つの危険に抵抗しなければならないというものです。人生における困難や誘惑によって神を疑ったり、神の計画から気をそらされたりしてはいけません。同様に、信者は、それがどんなに魅力的に見えても、偽りの教えに惑わされてはいけません。

キリスト教徒は、この困難な二つの課題をどのように達成すればよいのでしょうか？神の御言葉を受け入れること(すなわち、聖書の真理の原則を聞き、信じ、適用すること)によって、信者は霊的に成長し、信仰が強められ、人生の試練や困難に揺らぐことなく耐えることができるようになります。同時に、正統な教えと異端の教えを見分けることもできるようになります。

歴史的背景: ペテロは、紀元 62 年から 63 年頃にローマに滞在し、66 年から 67 年頃に殉教するまで、この二通の手紙をローマから送りました。ペテロがローマにいつ、なぜ去ったのかは正確には分かっていません。この件に関しては不正確な伝承が多くあります。しかし、彼がローマに滞在していたのは、54 年から 68 年まで統治したネロの治世中であったことは確かです。タキトゥスの『年代記』15.44 には、64 年にネロが主導し

たローマでの迫害について、わずかに知られていることのほとんどが記されています。ローマの都市の大部分を破壊した最近の火災を命じたという告発をかわすために、ネロはキリスト教徒を身代わりとして捕らえ、彼らにさまざまな非道な拷問(十字架にかけたり、生きたまま火あぶりにしたり、獣の皮をまとわせて野良犬に襲わせたりするなど)を課したと、タキトゥスは伝えています。ペテロ自身は、おそらくこの残虐な迫害の時期よりもかなり後、ネロの治世の終わり頃に殉教したと考えられます。ネロが熱狂的に、そして意図的にキリスト教徒を迫害したことがローマのポメリウム(市域)をはるかに超えていたことを示す直接的な証拠はあまり多くありませんが、首都におけるキリスト教徒への攻撃は地方にも影響を及ぼさざるを得ませんでした。また、タキトゥスが私たちの信仰を「墮落し、退廃し、恥ずべきもの」と評したことは、帝国中の信者たちが直面した無知、恐怖、敵意をある程度示しています。1世紀にキリスト教徒であることは、生活様式や命を危険にさらすことでした。

この事件から約50年後にトラヤヌス皇帝にキリスト教徒への対処法を尋ねる手紙を書いたプリニウス(10.96-97)は、1世紀の信者たちが直面した問題について、その一端を示しています。プリニウスは皇帝に、キリスト教徒の「名」を所有しているだけで法的措置を取るのに十分な罪となるのか尋ね、トラヤヌスは、プリニウスはキリスト教徒を積極的に探し出すべきではないが、そのような人物が特定された場合は、改宗を拒み皇帝に生贄を捧げることを拒むのであれば、処刑すべきだと答えました。プリニウスの手紙は、初期のキリスト教徒の法的地位が非常に危険なものであり、個人的な理由(例えば、異邦人が福音に対して示した反応に対する嫉妬、[使徒行伝 17 章 5 節](#))や、経済的な理由(例えば、パウロとシラスに対しピデでの迫害、[使徒行伝 16 章 19 節](#)、また、新しい信仰が女神アルテミス像の取引を損なうことを恐れたエペソでの暴動、[使徒行伝 19 章 23-41 節](#))など、さまざまな理由によるものでした。

1世紀の信者たちは、現代の私たちが生きている社会と同様に墮落した社会のあらゆる圧力や誘惑に対処しなければなりません(そして、私たちの今後の研究で、その共通点のいくつかについて検討する機会があるでしょう)。また、絶え間なく迫る迫害の危険に対して常に警戒していなければなりません。そのような環境では、個人的な悲劇や挫折はより大きな負担となるでしょう。ただ、**強く前向きな信仰だけが、そうした霊的成長の妨げに耐えうることでしょ**う。

迫害: この時代に、サタンが信者の信仰に対して間接的に仕掛けた攻撃についても、ここで少し触れておくべきでしょう。迫害や個人的な苦しみは、成長し、活気ある信仰に対する直接的な挑戦です。信者は「意気阻喪してしまう」ように追い込まれ、神が試練から救い出してくれるかどうか疑うようになります。しかし、誤った教えは、信仰に対

するより陰湿で欺瞞的な脅威であり、信仰の土台を蝕み、信仰を支える柱を腐らせます。私たちは、この研究の後半で、1 世紀の欺瞞的な教義と現代のそれらの類似点について検討します(これらは、正しくはペテロの手紙第二の主題です)。しかし、初代教会の信者たちは、私たちにとって当然のことである多くの利点を持っていなかったことを、最初にお断りしておかなければなりません(最も重要なこととして、完全な聖書はまだ存在していませんでした)。各教会の指導者たちは、キリスト教徒になってからまだ日が浅く、正式な訓練も神学校も、キリスト教に関する書籍もありませんでした。使徒たちが定期的に訪れることができるのは、最も重要な教会の中心地だけでした。しかし、そのような逆境にもかかわらず、私たちの仲間である信者たちは信仰を守り続けました。この 2 通の書簡の中で、ペテロは当時のキリスト教徒たちに、信仰を脅かす二つの脅威(すなわち、苦悩と偽りの教え)について警告し、信仰を守り確立するための正しい方法を思い出させ、彼らの人生が祝福され、永遠に完全な報いを得られるよう、彼らの霊的な潜在能力を最大限に引き出すよう促しました。

要約 結論:

執筆時期:西暦 62 年から 67 年

想定読者:小アジアの全信者宛の回状

場所と著者:使徒ペテロがローマから執筆

第一ペテロのテーマ:人生の問題(苦しみ)によって霊的な成長が妨げられないように

第二ペテロのテーマ:偽りの教えによって霊的な成長が妨げられないように

霊的成長:神は、私たちが神の真理を学ぶために必要なすべてのもの(聖書、自由意志、生活に必要なもの、神の御言葉の教えと説明を聞く機会)を与えてくださいます。神の御言葉を聞き、受け入れ(理解し、信じ、それに従って行動する)ことで、私たちは「建て上げられ」、霊的に成長し、人生における厳しい誘惑に対処できるだけでなく、主イエス・キリストに対する熱烈で揺るぎない愛を維持しながら、神が私たちに与えられた使命を達成できるだけの信仰の深さと広さを徐々に身につけていきます。

今こそ、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識によって成長しましょう。

[第二ペテロの手紙 3 章 18 節](#)

[移動:ペトロ 2:苦悩の使徒]